

■高丘親王(真如)
たかおかしんのう
遣新羅使停止 799＝

平城天皇の第三皇子で、嵯峨天皇の皇太子になるも、薬子の変で廃され出家、天竺を目指して旅立ち不明に。

平安京が都になってまもない頃、伊勢継子を母に、桓武天皇の皇太子安殿親王の第三子に生まれる。
宇佐八幡宮の神託後、称徳天皇が皇嗣を決めずに崩御、それまで続いてきた天武天皇の系統が天智天皇の系統に代わったため、朝廷内には緊迫の空気が漂い、光仁天皇の皇后になった井上内親王、その子で皇太子になった他戸親王は、すぐに厭魅大逆の罪を問われて廃后、廃太子となり、次いで即位したは、不破内親王とその子らを叛逆の罪で追放、また弓削女王らを配流、藤原種継が暗殺されると、自らの弟で皇太子だった早良親王を廃し、長子安殿親王を皇太子にした。

桓武天皇没・ 806＝ 7歳：桓武天皇が崩御、父安殿親王が踐祚して平城天皇となり、その弟賀美能親王が皇太子になると、伊予親王の変 807＝ 8歳：異母兄弟伊予親王とその母が謀叛を謀議したとして幽閉され、自ら抗議の死を選ぶという事件が起きるとい
う、緊迫した時代が続くなか、

・ ・ ・ ・ ・ 808＝ 9歳：
嵯峨天皇即位 809＝10歳： 父平城天皇が譲位、賀美能親王が即位して嵯峨天皇になると皇太子に立てられるも、母親の出自が波紋を呼んだらしく、自らの微妙な立場をわきまえて、傍目にも分かるほど、礼儀正しく、慎重に身を処して、世人から踴躍太子と呼ばれたほどであったが、

薬子の変・ ・ 810＝11歳： 薬子の変が起きて鎮圧されると、父平城上皇は剃髪入道、自らは皇太子を廃された。薬子の変に関与した証拠は無く、平城上皇の事件に対する責任も問われず、新しく皇太弟になった大伴親王(後の淳和天皇)の立太子の詔は出されたものの、廃太子の公式文書が出される事は無いままであった。

・ ・ ・ ・ ・ 817＝18歳：

最澄没・ ・ ・ 822＝23歳： 四品に叙せられ名譽回復がなされ、二人の男子もいたようであるが、
嵯峨上皇・ ・ 823＝24歳： 東大寺で出家、真如を名乗り、奈良の宗叡や修円を経て、空海の弟子になり、

・ ・ ・ ・ ・ 826＝27歳： やがて空海の十大弟子の一人となり、高野山に親王院を開いて阿闍梨の位を受け、

空海没・ ・ ・ 835＝36歳： 空海が入定すると、高弟の1人として遺骸の埋葬に立ち会っている。

その後は、平城旧京の池辺院超昇寺にいて、入唐求法を志して朝廷に願ひ出ていたらしいが、

遣唐使帰国終 839＝40歳：遣唐使は、この年の帰国節刀返上が最後となり、以後、再開されない。

承和の変・ ・ 842＝43歳：

・ ・ ・ ・ ・ 844＝45歳：

円珍入唐・ ・ 853＝54歳：

・ ・ ・ ・ ・ 855＝56歳： 地震が連続して発生、東大寺大仏の仏頭が落ちて、臨時の役所修理東大寺大仏司が設けられると、その長官である檢校に任じられ、修理の指揮、難渋するも努力の結果、

・ ・ ・ ・ ・ 860＝61歳： 供養会を開くに至り、清和天皇の詔で、法会すべてを指示、
・ ・ ・ ・ ・ 861＝62歳： *天平の開眼供養を再現するかのような盛大な儀で、僧行事檢校の代表として、その全体を取り仕切った直後、渡唐を許されて、超昇寺を出発、宗叡ら一行23人とともに、浪速津から、帰路につく貢綿船に同乗、大宰府で、唐の商人と出会い、博多から壱岐を経て、柏島に至り、唐の通事に船一隻を建造させ、

鴻臚館設置・ 862＝63歳： 完成とともに出帆、五島列島の遠値嘉島を経て、東シナ海を航行、唐の明州揚扇山に到着、
唐は武宗の仏教弾圧政策(会昌の廃仏)もあって、さまざまなチェックを受け、一行の一部は日本に帰国、

富士山噴火・ 864＝65歳： ようやく長安に到着、西明寺に入るも、仏教は衰退の状態にあつて優れた師に出会えず、在唐30余年になる留学僧円載を通じて、皇帝から天竺行きの勅許を得て、

・ ・ ・ ・ ・ 865＝66歳： 従者3人と共に広州より海路天竺を目指し出発、これらの状況は、同行できなかった者が帰国してを報告しているが、その後は行方不明になった。
16年後、在唐の留学僧中かん(王偏に鸛の左)から、「親王は先に震旦を過ぎ、流沙を渡らむと欲す。風聞するに羅越国に到り、逆旅に遷化すと」の申状が届き、マレー半島の南端あたりで没したということになる。遣唐使がなくなった後も、唐商人や通事が日本との間の交易活動に従事、その航路網に乗る形で渡航する僧らがあり、手紙や旅費などを送ることもできたことも注目される。